確かな学力と豊かな心を育む麻生田小の新たな特色づくり
～全職員で取り組む図書館教育を通して～

熊本市立麻生田小学校　校長　木下浩文

要約

麻生田小は長年、学力低位校、生徒指導困難校との世間的評価を受けてきた。近年では不登校の増加も見られる。これらの課題解決に向けて、児童と職員が一体となり、そして保護者や地域も巻き込んで「麻生田小は○○を頑張っている学校」と評価される学校の特色をつくりたい。そこで、図書館教育を麻生田小の新たな特色とすべく学校づくりを進め、確かな学力と豊かな心の育成に取り組んだ。校長として、どのように職員の意欲を高め、組織を構築し、外部団体を活用し、新たな特色づくりに取り組んできたかを報告する。
〈キーワード〉図書館教育、学力向上、豊かな心、特色ある学校づくり、多忙化の防止

１　主題設定の理由

平成 31（令和元）年度に本校に赴任した。元気に登校し、学校で仲間と活動し、楽しかったと帰宅する。そんな学校にしたいと思い、「安全・安心で毎日来たくなる学校」を学校経営スローガンに掲げた。麻生田小は元気な子供たち、一生懸命な職員、協力的な地域や保護者が多い。しかし、しばらくすると次のような課題が見えてきた。

（１）　児童の課題

・遅刻、欠席の児童が多い。平成 30 年度の不登校生は５人。
・学力が低い。全国学力・学習状況調査でも熊本市学力調査でも全国平均・市平均を下回る。
・自己肯定感が低い。心のアンケートや全国学力・学習状況調査の質問紙の結果から。
・児童間のトラブルが多い。自分の気持ちを言葉で伝える、相手の気持ちを推し量ることが苦手。

（２）　保護者の課題

・経済的に厳しい家庭が多い。給食費、校納金の未納が多い。要保護、準要保護家庭が約 3 割。
・教育力が厳しい家庭が多い。登校への無関心、児童虐待の案件。

（３）　教職員の課題

・一人一人が目の前のことや事後対応で多忙。組織的対応が十分ではない。
・「麻生田小は家庭が厳しいから」「麻生田小は学力が低いから」などネガティブな発言が出る。

これらの課題の対応に追われるのではなく、予防的取組をしたい。そのために児童と職員、保護者、地域も一体となって「麻生田小は○○を頑張っている」と児童や職員が誇りに思い、保護者や地域、他校からも評価されるような新たな学校の特色をつくりたい。そこで、図書館教育に取り組むことにした。

２　実践主題

確かな学力と豊かな心を育む麻生田小の新たな特色づくり
～全職員で取り組む図書館教育を通して～

３　実践の視点

（１）　職員の意識改革と組織づくり

（２） 時間の確保と多忙化の防止
（３） 外部の力の活用

４　実践の具体

（１）　図書館教育に関する本校の実態

①　児童の実態

司書教諭と司書業務補助員（以下学校司書と記す）の取組で貸出冊数は年々増加していた。しかし、児童が読んでいる本は漫画、図鑑などすぐに読み終わる「見る本」が多く、読み応えのある物語など「読む本」が少ない。また、全国学力・学習状況調査や熊本市学力調査の結果は全国平均、市平均を大きく下回り、長年学力低位の状態が続いていた。生徒指導面では、自分の気持ちを言葉で伝えたり、相手の気持ちを推し量ったりすることが苦手でトラブルになることが多い。

②　職員の実態

これまでも司書教諭と学校司書が中心となって図書館教育に取り組んでおり、図書館教育の素地がある。他の職員も協力的であるが、読書指導、利用指導、図書委員会の活動、購入図書選定などはほとんど司書教諭と学校司書で行っていた。また、ＰＴＡの図書委員や読み聞かせボランティアの活動がすでにあり、協力を得やすい。

③　学校図書館の実態

本校の学校図書館は北側校舎２階でほぼ校舎の中心に位置し、場所としてはよい。しかし、広さとしては手狭感がある。書架の他に閲覧用の６人掛けテーブルが６台あり、絵本コーナーは畳敷きとなっているが使い勝手がよくない。図書購入費は 165000 円で十分とは言えない。

（２）　職員の意識改革と組織づくり

①　図書館教育の提案

校長として図書館教育を麻生田小の新たな特色とし、「麻生田小は読書を頑張っている」と児童、職員も自負し、保護者、地域、他校から評価を受ける学校にしたい。しかし、日頃から多忙感のある職員は新しい取組に対して負担を感じるだろう。そこで、職員の納得を得るために「なぜ図書館教育に取り組むのか」について校内研修を実施した。校長が講師を務め、『図書館教育の必要性』を、①子供の実態（問題行動、学力低下、読書の質）、②学習指導要領（主体的学習活動や読書活動の充実）、③特色ある学校づくり（何を頑張っている学校か）の３点から資料とデータを示してプレゼンを行なった。そして、『図書館教育の意義』について、①「徳・知」の育成、②自己肯定感の向上・愛校心の育成、③開かれた学校づくりの３点とし職員の理解に努めた。さらに、具体的取組と成果のイメージを図１のように例示した。しかし、価値があるとわかっても、ではやりましょうとはなかなかいかないものである。そこ

具体的取組のイメージ

・学校図書館の蔵書を増やす、レイアウトを変える
・学校図書館で本を読む、借りる児童を増やす
・読書活動につながる授業を行う
・学校図書館以外にも読書環境を作る
・担任やボランティによる読み聞かせを行う
・読書感想画、読書感想文コンクールに応募する

成果のイメージ

・蔵書数、貸出数、読書時間の増加
・学力調査の結果の向上
・感想文、感想画コンクールの入賞者の増加
・「学校が楽しい」の増加、自己肯定感の向上
・遅刻、欠席、いじめ、問題行動の減少

【図 １　具体的取組と成果のイメージ】

には、もう１つ強力に後押しするものが必要である。そこで、市教委の研究委嘱校を希望したいことを伝え、理由として次の３つを示した。①研究したいことができる。本校は平成 24 年以来研究発表をしていないので研究指定の可能性がある。研究指定は研究内容を市教委から指定させる。それならこれまでの素地がある図書館教育を柱に研究委嘱を受けたほうが本校が研究したいことに取り組めるのではないか。②予算が配当される。研究委嘱校となれば旅費や報償費、需要費などの予算が付くので先進校視察や力量のある講師の招聘が可能になる。③保護者、地域の協力が得やすい。ＰＴＡの図書委員や地域の読書ボランティアなど協力していただける団体がある。研究発表会で本校の取組を広く公開することで保護者、地域や他校にアピールができ、評価を受けることができる。以上のことを校内研修で資料を示して説明し、職員の納得も得て、研究委嘱校希望を決定した。結果的に研究委嘱・指定校制度が廃止なり、令和２・３年度授業改善・学力充実研究モデル校の指定を受けて図書館教育に取り組むことになった。

②　研究推進の核となる人材の育成

図書館教育に全職員で取り組むためには研究を推進するリーダーの育成が必要である。そこで、研究主任、図書主任（司書教諭）に加え、道徳教育推進教員として活躍している若手教諭を図書副主任としてリーダーに指名した。まずは、図書館教育への理解を深め、実践や研究発表会のイメージを持ってもらうために、九州地区学校図書館協議会研究大会での実践発表校や図書館教育研究指定校から２校を選定し、令和２年１月に校長を含めた４人で長崎へ先進校視察に行った。

ア　長崎市立滑石小学校

平成 29 年度九州地区学校図書館研究大会大分大会で「学力向上は学校図書館から」のテーマで発表。スーパー司書教諭による学校図書館の環境整備と運営が参考になる学校であった。

イ　長崎市立横尾中学校

平成 30・令和元年度長崎市教育委員会研究指定「学校図書館教育」研究発表会で「未来を見据え、情報を活用する力と読書への関心を高める図書館教育」の研究テーマのもと、図書館教育に全校で取り組んでいた。

③　研究イメージの共有化と不安の払拭

ア　先進校視察の報告会

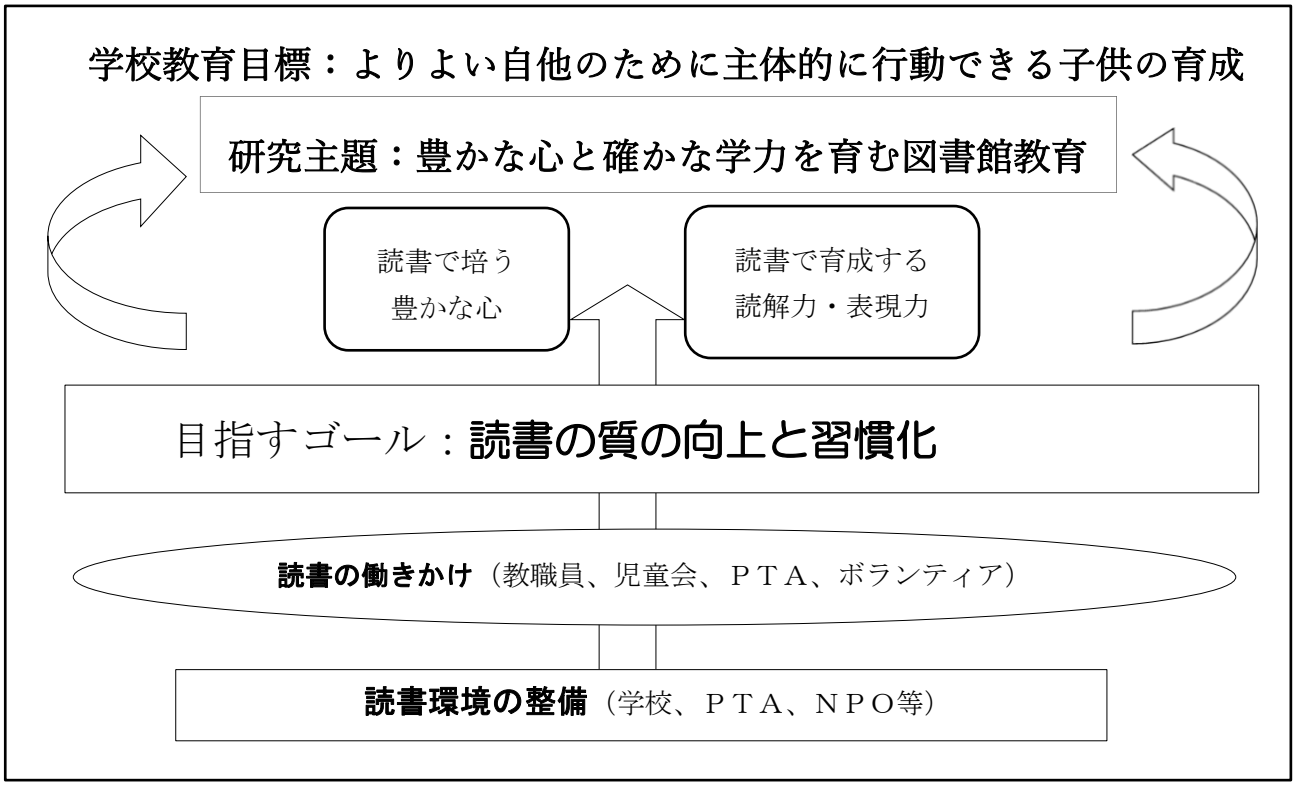
先進校視察後、校内研修で視察報告会を行った。まず、校長から図書館教育の概要と一般的な取組について基調提案を行った。その上で、視察メンバーから２校の取組について報告した。２校がどういうアプローチで図書館教育に取り組んでいるかを比較しながら理解することで、図書館教育の研究のイメージを全職員が共有できたようだった。

イ　疑問点とＱ＆Ａ

研究のイメージがつかめても図書館教育の経験がないので、職員は不安や疑問を持つのが当然である。そこで、校内研修で図書館教育に対する不安、疑問、意見等を全職員に付箋紙に書きだしてもらった。かなりの数になったが、少しでも不安を払拭するために項目ごとに島分けをして校長が回答を考え、Ｑ＆Ａにまとめて全職員に配布して不安の払拭に努めた。

④　研究の構想

研究主題を「豊かな心と確かな学力を育む図書館教育～読書の質の向上と習慣化を目指して～」と設定し、研究の構想を図２のように考えた。研究の目指すゴールを「読書の質の向上と習慣化」と設定し、そのために読書環境の整備とさまざまな読書の働きかけを行う。その結果としてゴールの先に「豊かな心と確かな学力」の育成が図られればよいと考えた。



【図 2　研究の構想図】

⑤　全職員参加の研究組織の構築

全職員で取り組むために４つの部からなる全職員参加の研究組織を表１のように構築した。

【表１　全職員参加の研究組織】

部	環境整備部	運営部	授業活用部	連携部
部長	学校司書	図書主任（司書教諭）	研究主任	図書副主任
部員 協力 員	学校司書・教職員 学校主事・学校事務 ＮＰＯ法人	司書教諭・教職員 図書委員会（児童会） ＰＴＡ･ボランティア	教職員 外部講師 教育センター	教職員
担当 内容	○選書・レイアウト ○学級文庫の整備 ○利用案内・利用指導 ○相互貸借・ﾘｸｴｽﾄ便 ○読書記録 ○活用の手引き	○図書委員による ・イベント・本紹介 ・読み聞かせ等 ○魅力ある読書活動の提案と実技研 ○国語年間活用計画 ○ＰＴＡ・ボランティアとの連携	○指導案形式提案 ○年間活用計画を活かした授業提案 ○語彙力、表現力の育成に向けた活動提案 ○読書感想文の指導法研修 ○研究授業の支援	○実態調査内容検討 ○調査統計 ○ルール 10 の活用 ○言語環境整備（環境整備部との連携） ○月の学習目標 ○児童会の関わり

（３）　時間の確保と多忙化の防止

研究指定を受けて図書館教育に取り組むにあたり、今まで以上に多忙になるのではないかと職員は不安を抱いていた。そこで、多忙化防止のための取組を同時に行った。

①　「学校改革！教員の時間創造プロジェクト」学校業務改善モデル校の取組

市教委の学校業務改善モデル校に応募して働き方改革を同時に進めた。(株) コクヨよりアドバ

イザーが派遣され、数回にわたる校内研修を実施し、図３のように現状から本校の問題点を洗い出し、課題を明らかにし、グループごとに改善策を検討した。

【図 3　本校の問題点、課題、改善策一覧】

改善策では、例えば環境整備の働きやすい職場レイアウトでは、職員室に職員から要望が多かったコピー機と金庫を設置した。また、印刷コーナーをリニューアルして利便性を向上させた。さらに、職員室前面上部に大型モニターを設置して職員への連絡事項を周知し、職員朝会、職員会議の時間短縮を図った。他にも職員のアイデアでさまざまな働き方改革に取り組んでいる。

②　時間の確保

ア　校内研修・職員会議の見直し

研究のために校内研修は増やさないことを職員に約束し、運営の見直しを行った。８０分の校内研修を６０分と２０分の２つのユニットに分け、６０分のユニットで通常の校内研修を行い、２０分のユニットを研究主題の研修時間とした。また、８０分の職員会議も担当者や運営委員会での事前協議を徹底することで６０分に時間短縮し､残りの２０分を予備の時間とした。これにより、校内研修の時間を確保するとともに職員の時間的負担増を防ぐことができた。

イ　日課表の見直し

水曜日は掃除をカットして下校を 15 時 40 分とし、会議、研修、委員会、部会などを設定しない定時退勤日とした。これにより放課後に時間的余裕が生まれ、職員に好評である。また、朝の時間と職員朝会の見直しも行った。水曜日の朝の時間を一斉読書とし、金曜日を読み聞かせの時間とした。月２回の職員朝会のときはボランティアが行い、それ以外は担任が行うこととした。これにより、週１時間と図書館の時間とあわせて読書の時間の確保ができた。職員朝会は毎週月曜と木曜の週２回だったが、木曜日の職員朝会を金曜日に移し、月２回とした。

ウ　委員会・部会の見直し

毎週水曜日の放課後にＡＳＣＯＴ（Asoda Special COordinate Team）という校長、教頭、教務、生徒指導、特別支援教育コーディネーター、養護教諭からなる会議が設定されていた。児

童理解と情報共有の貴重な時間であったが､時間的負担が大きいとの声が大きかった｡そこで、委員会・部会の設定の見直しを行った。ＡＳＣＯＴを週１回とし、ＡＳＣＯＴ、研究推進委員会、校内委員会、生徒指導部会を木曜日の放課後に変更した。また、ＡＳＣＯＴ、校内委員会、運営委員会はメンバーや内容の重複があったので、メンバーや内容を整理し、併せて学びタイムと部活動の担当者、実施回数の見直しも行い、職員の部会、委員会、部活動への参加の平均化と負担の軽減を行った。これらをまとめたものが表２である。

【令和元年度】　　**【表２　日課表・委員会・部会の見直し】**

	月	火	水	木	金
朝の時間	職員朝会（毎週）			子供を語る会（毎週）	
読書活動				全校読書	
放課後	職員会議（月１） 校内研修	学年会（毎週）	ＡＳＣＯＴ （月３） 校内委員会 （月１）	研究推進委員会 運営委員会 人権教育推進委員会	
部活動等		総合運動部 音楽部	音楽部	総合運動部	学びノート教室 音楽部

【令和３年度】

	月	火	水	木	金
朝の時間	職員朝会（毎週）				職員朝会（月１） 子供を語る会（月１）
読書活動			全校読書		読み聞かせ
掃除			掃除カット		
放課後	職員会議（月１） 校内研修	学年会（毎週）		生徒指導部会 研究推進委員会 ＡＳＣＯＴ 校内委員会	運営委員会（月１）
部活動等		音楽部		学びタイム 総合運動部	音楽部

（４）　外部の力の活用

①　ＮＰＯ法人「ガット」による学校図書館のリニューアル

ＮＰＯ法人「ガット」は、学校図書館や子供の学習・文化活動に関する事業を行っている団体である。令和２年に学校図書館のリニューアルを依頼した。不要な書架を撤去し、本の陳列を工夫し、内装の模様替えをし、授業ができるスペースを確保し、明るく機能的なレイアウトとなった。新しい学校図書館は児童にも職員にも好評である。

②　ＮＰＯ法人「子育て支援ワーカーズぺぺぺぺらん」による読み聞かせ講座

子育て支援ワーカーズ「ぺぺぺぺらん」は本校の近隣に所在し、昔話の語り聞かせ、絵本の読み聞かせ、おはなし会などを行っている団体である。そこで、職員向けの読み聞かせ講座を依頼

した。選書から読み聞かせのスキルまで専門的な指導で、職員に好評であった。

③　読み聞かせボランティア「ハートブック・マァム」

「ハートブック・マァム」は保護者・元保護者からなる読み聞かせボランティアで、これまでも読み聞かせをお願いしていたが、ＰＴＡと連携して実施回数を増加していただいた。

④　ＰＴＡ図書委員

これまでの学校図書館の掲示物の作成、貼り替えに加え、昼休みのお話会や読み聞かせを実施していただいた。また、ＰＴＡには図書購入費の助成を承認いただいた。

⑤　各種団体による研究助成金

研究予算の確保のため、研究モデル校としての旅費、報償費、需用費の配当の他に、各種団体の研究助成金を申請した。「パナソニック財団」は承認されなかったが、「日本教育弘済会熊本支部」より学校教育研究助成金８万円、「公益財団法人ちゅうでん教育振興財団」より教育振興助成金２７万円の助成を受けることができ、図書館教育推進のための財源が確保できた。

⑥　学校図書館協議会事業の活用

各種コンクールは身近な目標となり、高評価は自信と周囲へのアピールになる。そこで、熊本県学校図書館協議会が主催する「読書感想文コンクール」「読書感想画コンクール」「学校図書館コンクール」に応募した。読書感想文は実践校の指導法を学び、全校で取り組んだ。読書感想画の指導法を専門家に学ぶ校内研修はコロナ禍で開催できなかったが、図工専科を中心に取り組んだ。結果、多数の個人入賞に加え読書感想画コンクールでは「努力校賞」を受賞した。また、学校図書館コンクールでは最高賞の「全九州学校図書館コンクール優秀賞」を受賞した。さらに、１年目の実践を「熊本県学校図書館研究大会」で、２年目の実践を「九州地区学校図書館研究大会」で発表した。節目で取組をまとめたことは研究の振り返りとその後の取組に有効であった。

５　図書館教育の取組の具体

本校の図書館教育の取組の詳細については麻生田小として教育論文(団体の部)にまとめているので重複を避け、ここでは運営部、授業活用部、環境整備部の取組の概要のみを記述する。

（１）　運営部

①　おすすめの本の紹介

学校図書館入り口にモニターを設置し、学校司書や図書委員会、授業で児童が作成したおすすめ本のプレゼンを常時流しており、多くの児童が足を止めて見ている。職員の推薦本は学校図書館内に掲示している。また、全児童が本の紹介カードを作成し、学級ごとに廊下に展示している。

②　読書月間イベント

児童会の図書委員を中心に、クイズ、イラストコンクール、読書ビンゴ、しおりづくり、読書運動会などさまざまなイベントを実施し、児童が楽しみながら本に出会うように工夫している。

③　読み聞かせと朝の読書

水曜日の朝の時間は一斉読書である。金曜日は担任やボランティアによる読み聞かせである。職員室に読み聞かせお薦め本のコーナーを設置している。また、全校朝会では校長がいじめ根絶月間、人権月間、読書月間などテーマに応じた本の読み聞かせやブックトークを行ってきた。取り上げた本のシリーズや関連本のコーナーを学校図書館に設置し、その後の読書につなげている。

（２）　授業活用部

本校は平成 30・令和元年度に「学ぶ楽しさや分かる喜びを実感できる授業の創造」を研究テー

マに授業改善に取り組んできた。そこで、これまでの研究を継続し、国語科を中心に授業における学校図書館の活用、読書活動の推進に取り組んだ。司書教諭が読書教材と図書に広げられる教材を明記した国語科年間指導計画を作成し、低中高で研究授業を行い、授業研究会で検証した。

① 令和２年度の実践

ア ４年生「本をみんなにすすめよう」（東京書籍４年下）高群一幸教諭

イ ２年生「どんな本を読んだかな」（東京書籍２年下）平富祐助教諭

ウ ５年生「伝記を読んで感想文を書こう『手塚治虫』」（東京書籍５年）森優太教諭

② 令和３年度の実践

ア ２年生「どんな本を読んだかな」（東京書籍２年下）森昌子教諭

イ ４年生「本をみんなにすすめよう」（東京書籍４年下）尾﨑真奈美教諭

ウ ５年生「友達といっしょに、本をしょうかいしょう」（東京書籍５年）永野久美子教諭

本年度の実践は「授業改善・学力充実研究モデル校」として１２月の公開授業・実践発表会で発表した。助言者は学校図書館協議会や小学校国語研究会で会長等を務め、国語教育にも図書館教育にも精通されている校長・元校長にお願いした。各助言者には指導案作成の時点からご指導を頂き、学年部会ごとに指導案検討会を重ね、事前授業を行い、職員の授業力向上を図ってきた。公開授業当日の授業は、本校の図書館教育の取組と合わせて参加者からは高評価を得た。

（３） 環境整備部

① 授業と連動した読書環境づくり

学校司書が学級・学年通信から授業の進度や内容を把握し、読み聞かせやブックトークの準備に利用している。また、国語の教科書に出てくる本や作者の本を優先して学校図書館に揃え、コーナーを作って学年別に配架している。その本を借りた児童には教科書にシールを張っている。

② 学級文庫

これまでの学級文庫はいつからあるかわからない古い本だった。本棚も冊数もバラバラで、管理も入れ替えもなされていなかった。そこで、これまでの本を廃棄し、学校図書館の本を配置し、学期毎に入れ替えることとした。また、各学級に２つのコンテナを準備し、１つは「読む本」もう１つは「見る本」を入れ、授業中や朝の読書では「読む本」を読むよう共通実践している。

③ 本の広場

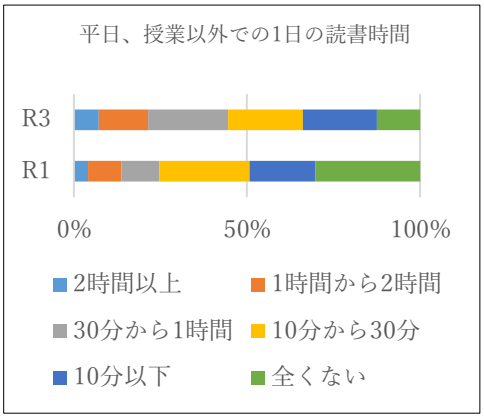
図書委員会の発案で各学年の廊下に「本の広場」と名付けた図書コーナーを設置した。看板を作り、テーブルや椅子を設置している。学校司書が担任と連携して、その時々の学習や学年行事に関する本などを定期的に入れ替えている。授業の調べ学習に利用している児童の姿も見られる。

６ 研究の成果と課題

（１） 研究の成果

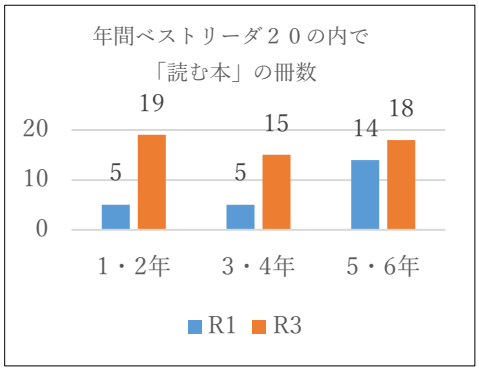
① 読書の質の向上と習慣化

年間の一人当たりの平均貸出冊数は令和元年度７８冊、令和２年度７０冊、令和３年度８９冊（12 月末までの数から推計）である。コロナ禍の休校や分散登校を加味すると貸出冊数は増加していると言える。また、全国学力・学習状況調査の質問紙で「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、



【図４ 平日、授業以外での１日の読書時間】

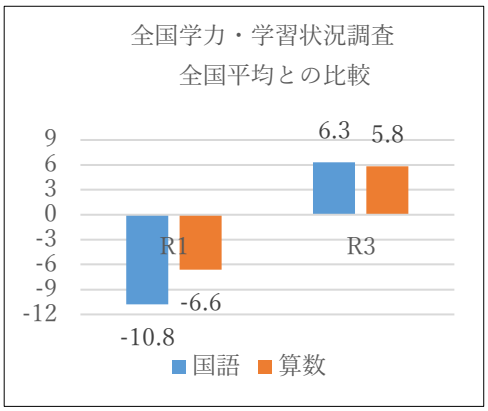
読書しますか」という質問の結果を令和元年度と令和３年度を比較すると、「２時間以上」「１時間以上、２時間より少ない」「３０分以上、１時間より少ない」と上位項目での伸びが見られる。一方、「全くない」は大幅に減少した（図４）。さらに、年間ベストリーダ２０の統計を学校司書の視点で「見る本」と「読む本」に分類し令和元年度と令和３年度を比較すると、低・中・高学年とも「読む本」が増えている。（図５）このようなデータから読書の質の向上と習慣化が図られたと考える。

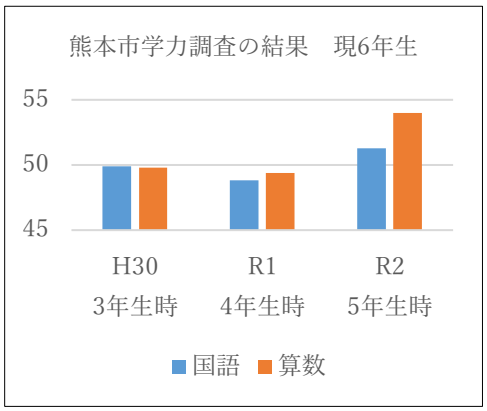


【図　５　ベストリーダ 20 の「読む本」の冊数】

②　学力の向上

全国学力・学習状況調査の結果では、令和元年度は正答率で全国平均を国語は 10.8 ポイント下回り、算数は 6.6 ポイント下回っていた。令和３年度は国語は全国平均を 6.3 ポイント上回り、算数は 5.8 ポイント上回った。母集団は違うが大幅な向上がみられた。（図 6）熊本市学力調査の結果では、令和２年度は３年国語がわずかに全国平均に及ばなかったが、それ以外の３年算数及び４年以上は全教科とも全国平均を上回った。特に５年算数・社会・理科、６年算数・理科は３ポイント以上上回った。また、現６年生を図書館教育の取組前の平成 30 年度から経年変化で見てみると、国語、算数共に確実に向上している。（図 7）本年度の結果は出ていないが、これらの結果から、学力は確実に向上していると言える。

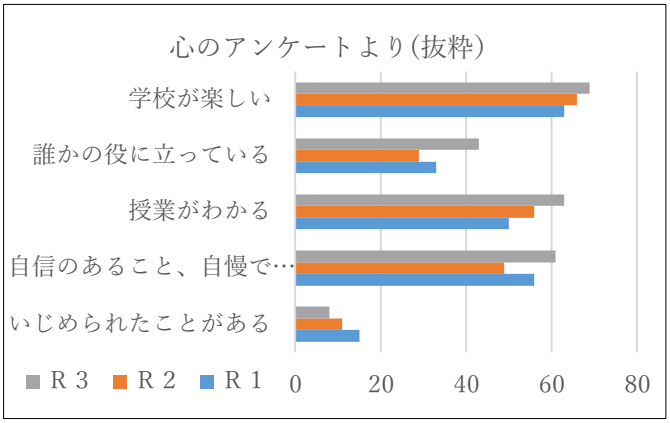




【図６　全国学力・学習状況調査の結果】　【図　７　熊本市学力調査の結果】

③　豊かな心の育成

「心のアンケート」の中から、「学校が楽しい」「誰かの役に立っている」「授業がわかる」「自信のあることや自慢できるものがある」の経年変化を見てみると、最高評価の「ア」の％が年々増加している。一方、「いじめられたことがある」の％は減少している。（図８）全国学力・学習状況調査の質問紙や学校評価からも同様の傾向が見られ、自己肯定感が高まり、豊かな心が育まれていることが推察される。



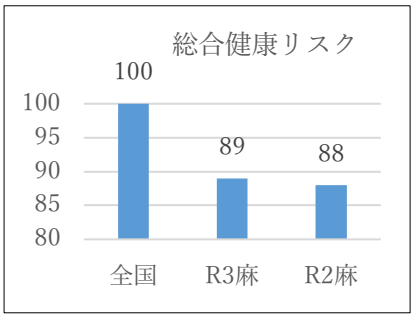
【図　８　心のアンケートより】

（２）　実践の成果

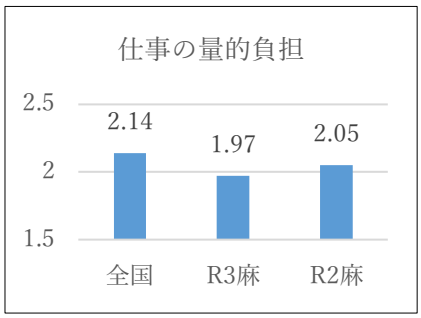
①　多忙化の防止

『ストレスチェック集団行動分析』の結果をみると、「総合健康リスク」は令和２年度は８８、令

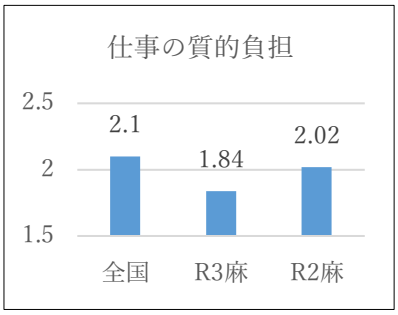
和３年度８９でほぼ変わらず、全国平均値と比較して良い傾向値にあり、健康リスクは低い状態となっている。（図９）上司の支援、同僚の支援がともに高く、良好な状態である。また「仕事の量的負担」（図 10）「仕事の質的負担」（図 11）も全国平均より低く、令和２年度より低下している。これらの結果から、図書館教育の取組が職員の多忙感につながっていないことが分かる。



【図９　総合健康リスク】



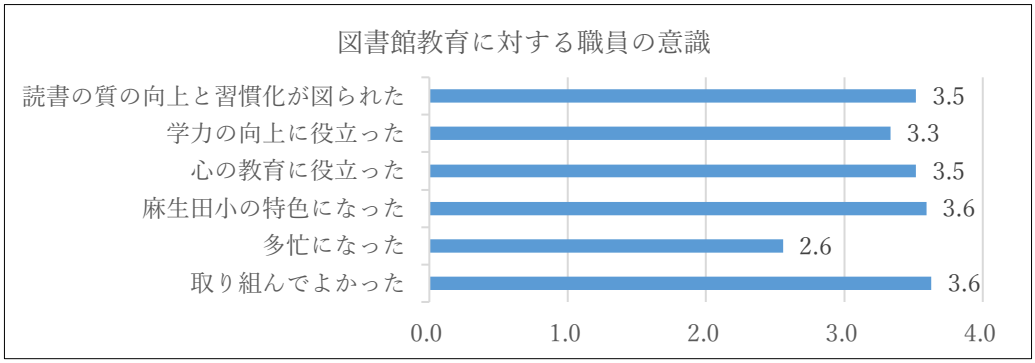
【図 10　仕事の量的負担】



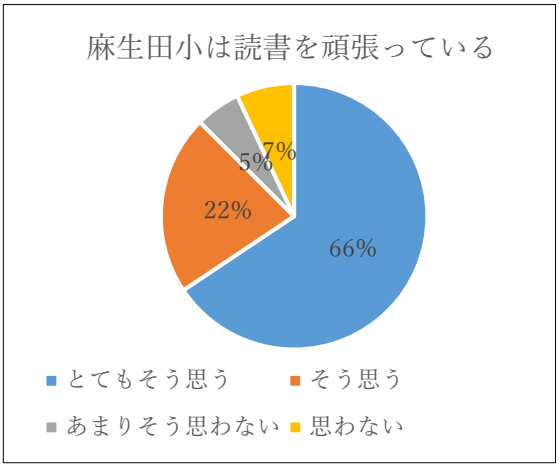
【図 11　仕事の質的負担】

② 職員と児童の意識と課題

職員の意識調査では「図書館教育は麻生田小の特色になった」の評価が 3.6 と最も高い。（図 12）児童の意識調査では「麻生田小は読書を頑張っている学校だ」の質問に対して「とてもそう思う」66%。「そう思う」22%、計 88%の児童が肯定的に評価している。（図 13）このように各種調査の結果から、２年間の取組を通して児童や職員の意識の中では図書館教育は確実に麻生田小の新たな特色となってきている。一方、保護者や地域に対しては、各種通信や安心メール、ホームページを通して取組を発信してきた。また、他校には研究大会や公開授業・実践発表会で発信してきた。しかし、コロナ禍で対面による授業参観、学級懇談会、研究大会、公開授業ができない中、十分な評価をいただくまでには至っていない。今後は校内での取組を継続しながら、校外への発信を強化していきたい。



【図 12　図書館教育に対する職員の意識】



【図 13　図書館教育に対する児童の意識】

7　おわりに

２年間、コロナ禍でもできることを探りながら全職員で図書館教育に取り組み、成果を上げてきた。「取り組んでよかった」との職員の評価が校長としてうれしい。図書館教育は麻生田小の新たな特色として確実に根付きつつある。今後は、保護者、地域、他校に評価されるように更に進めていきたい。